

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第10回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

生徒と生徒をつなぐために

前号（12月号）には、わたしの5年間の担任の経験を書きました。当時のわたしは、クラスづくりのために、ひとりひとりの生徒とわたしがつながることが大切だと考えていました。特に、在日コリアンや部落出身の生徒と社会科学部（以下、社研）や隣保館の学習会などを通してしっかりとつながろうと思いました。そして、そうしたつながりをクラスの生徒たちに結びつけることで、在日コリアンや部落出身生徒のカミングアウトが可能となると考えていました。しかし、2回目の卒業生を出したあと、そうした生徒たちのカミングアウトを振り返った時、もしかしたらそれは自己満足に過ぎなかったんじゃないだろうかと思ったのです。そこで、3度目の一年生の担任を持った時、やり方を大きく変えました。

まずは、クラスの生徒たちとわたしの距離を変えることにしました。例えば、文化祭の責任者から「Aがサボるねん」という相談があった時、それまでのわたしであれば、自ら乗り出して、サボる生徒を連れてきたりしていました。しかし、これではあくまでも「わたしとA」の関係にしかありません。そこで責任者の生徒に「Aに注意できるのは誰やと思う？」と問いかけることにしました。そして、例えばBという生徒がAに注意できることがわかれば、責任者の生徒に「Bに言ってもらい」とアドバイスすることにしました。このようにして、生徒たちとわたしの距離をほんの少し遠ざけて、生徒と生徒がつながるようにしました。すると、あまりにも距離が近すぎて俯瞰できなかったクラス全体を見渡すことができるようになりました。ただし、あまりにも距離を遠ざけてしまうと、生徒たちからクラスのメンバーとして認めてもらうことができません。そこで、学級通信を出すことを通して、教室の中に「ネタ集め」に行くことにしました。このようにして、「適度な放任と適度な介入のバランス」をとろうと考えました。

クラスづくりは、実はキャンプにおけるグループづくりととてもよく似ています。ただし、キャンプは数日

間という短期決戦であることに對し、クラスづくりは1年から3年という長丁場であることが違いでしょうか。しかし、クラスという集団が生徒たちを成長させ、生徒たちの成長がクラスを成長させていくという点においては、ほとんど変わりがないと思います。そこで、担任として、キャンプにおけるカウンセラーの役割をすることにしました。

もうひとつ、学校行事をキャンプにおけるプログラムと考えました。すると、それぞれの行事にクラスづくりのための意図を持たせることができるようになりました。例えば、わたしの勤務校では遠足は年度当初に配置されています。であるならば、遠足という行事を中学校や旧クラスという古い人間関係から現在のクラスという新しい人間関係へのつくり替えを促すために使おうと思いました。遠足の行き先決めも、単に代表が前に出て多数決で決めるというスタイルではなく、班討論を経て決めるようにしました。もちろん文化祭というビッグイベントも、クラスづくりのための「仕掛け」と位置づけました。このように考えると、理不尽な校則の代表例である「服装頭髪点検」すらイベントとしての性格を与えれば、クラスづくりに使えることがわかりました。

このような「適度な放任と適度な介入」というスタンスをとることで、生徒たちは自由に動けるようになったようです。わたしの知らないところで対話を重ね、それが部落出身生徒によるカミングアウトへとつながっていきました。また、そのカミングアウトがクラスの生徒たちをより強く結びつけるものとなりました。

交流会もまた、「わたしと参加者のつながり」ではなく「参加者同士のつながり」のためにあります。そういう場におけるわたしの役割は、この時の経験によるところが大きいように思います。

では、交流会が担わなければならないこと、交流会だからできることとは何か。それを「社研」の生徒から教えてもらった気がします。そこで、次号には「社研」の活動から学んだことを書こうと思います。